

秋建時報

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋建時報

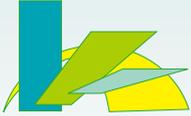
平成23年12月1日(第1211号)

発行／(社)秋田県建設業協会

秋田市山王四丁目3番10号

TEL 018(823)5495

FAX 018(865)2306



「朱い実」 絵／文 白澤恵舟

大震災から始まって、緊迫した世界経済へと、まるで氷河期のような世の中であった。将来への不安もいっばいの年末だが、極寒の銀色の中に朱い実を散らして、せめてもの、ほっとした雰囲気を出したかった。
来る年のご繁栄ご多幸をお祈りします。

文化功労者に菅原名誉会長

平成23年度文化功労者・自治功労者表彰

秋田県は11月2日、秋田県庁・正庁において平成23年度文化功労者表彰・地方自治功労者表彰式典を行い、文化功労者6名・1社、地方自治功労者26名を表彰した。

文化功労者表彰においては本会の菅原三朗名誉会長が受章。秋田県肢体不自由児協会会長や社団法人全国肢体不自由児

父母の会連合会の理事、副会長として、勝平養護学校の設立や同連合会全国大会の秋田県誘致など、秋田県及び全国の肢体不自由児者の療育・教育の充実向上、自立支援・処遇の改善に尽力するなど福祉の充実・向上に対する功績が認められ、この度の榮譽に輝いた。



秋田労働局・秋田県・協会

建設雇用・構造改善推進大会

11月15日、秋田労働局、秋田県、(社)秋田県建設業協会の主催による平成23年度建設雇用・構造改善推進大会が秋田ビューホテルで開催され、関係者約120名が参加した。

大会は二部構成で開かれ、第一部は秋田労働局と秋田県が参加者に向けて助成金及び企業支援制度の紹介・説明を行った。

第二部では、表彰式と企業の人材対策事例発表が行われた。

第二部の冒頭、坂本忠行秋田労働局長が挨拶に立ち、県内雇用情勢を説明、業界の経営・雇用情勢は厳しいとして、第3次補正予算による震災復興、また、雇用対策の一部前倒しにより雇用の場を確保する旨を述べた。その後、熊谷淳秋田県建設交通部次長の挨拶に続いて登壇した本会の村岡淑郎会長は建設業の社会的使命・役割がますます深化しているとのべ、「建設業が発展していくためには、得意分野や期待できる分野に重点を置くとともに、経営体質と技術力の強化、将来を担う人材の確保・育成を図っていくことこそが極めて重要であると考えます」とあいさつした。

次に、瀬戸下伸介秋田河川国道事務所長が祝辞を述べた後、表彰式が行われ、国土交通大臣表彰、秋田県知事表彰、秋田県建設業協会会長表彰などの受賞者に対し表

彰状授与・伝達、記念品贈呈が行われた。

表彰式の終了後、建設産業の人材対策に対する功績で国土交通大臣顕彰を受賞の(株)菅与組、国土交通省土地・建設産業局長顕彰を受賞の(株)佐藤庫組が「人材の活用・育成・定着」と題し、それぞれの人材対策の事例を発表した。

[国土交通大臣表彰]

加藤憲成 (株)英明工務店

[国土交通大臣顕彰]

優秀施工者

榎 清英 むつみ造園土木(株)

石垣堅太郎 (株)堀川

柏木茂成 (株)寒風

佐々木新喜 (株)加賀昭塗装

佐藤義則 (株)富士ボーリング

田村伸男 田中建設(株)

由利幸彦 (株)渡部組

建設産業の人材対策

(株)菅与組 代表 畠山順太郎

[国土交通省土地・建設産業局長顕彰]

建設産業の人材対策

(株)佐藤庫組 代表 佐藤昌郁

[秋田県知事表彰]

雇用改善優良事業所

(株)英明工務店 代表 加藤憲成

優秀建設現場従事者

中嶋清巳 (株)佐藤庫組

安達進一 秋田機械建設(株)

高谷則幸 (有)金森建築

山田義雄 田中建設(株)

金 一彦 クボノメ工業(株)

長澤郁夫 高三建設(株)

中野龍一 (株)秋田県南重機

高橋宏勝 (株)佐々木組

[社団法人秋田県建設業協会会長表彰]

雇用改善優良事業所

(有)和田興業 代表 和田利夫

(株)伊勢組 代表 伊勢俊昭

(株)コンノ土木 代表 金野憲行

珍田工業(株) 代表 珍田伸一

菊地工業(株) 代表 菊地晃一

万六建設(株) 代表 田中恒雄

(有)折原建設 代表 折原大樹



理事長表彰

普及・履行確保等の功績を称えて

勤労者退職金共済機構では、10月を「加入促進強化月間」と定めており、本制度のより一層の充実を図ることとしております。

その加入促進強化月間の一環として、本制度の趣旨である普及徹底、加入促進及び履行確保に積極的に貢献している建設業退職金共済制度普及協力事業所として、(株)寒風、(株)村岡組が、理事長表彰を受賞。11月15日開催された平成23年度秋田県建設雇用・構造改善推進大会において、村岡淑郎秋田県支部長より表彰状及び記念品を伝達されました。

【制度普及協力事業所】

●株式会社 寒 風

代表取締役社長 菅原 廣悦 男鹿市

●株式会社 村岡組

代表取締役 村岡 志朗 横手市



(財)建設業福祉共済団から

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

秋田水風景

文と写真/加藤隆悦

フリーカメラマン兼フリーライター
取材・執筆歴/旅の手帖、WoodyLife、ペンチャー・リンク、郷、ある他
海外取材歴/ドイツ、アメリカ、ブラジル
写真塾・写案 主宰/写真教室、撮影ツアー企画等

Vol.29

ボツメキ湧水

【ぼつめきわきみず】

由利本荘市東由利田代字沢中



先年私は、『秋田のわき水』という本の刊行のお手伝いをさせていただいた。著者をサポートして、県内各地にある湧き水の所在地を特定する実地踏査をするものであった。すべてを網羅したわけではないが、それでも私の訪れた湧き水だけでも70ヶ所以上にのぼる。つぶさに探してみると、湧き水というのは至る所にあるものようだ。

そしてそれらは、人知れず淡々と地上に溢れ出しているものもあれば、しっかりと水汲み場や洗い場が造られていて、地域住民の暮らしになくてはならないものになっているものもある。

都市部で水道水に頼り切って生活している者にはいささか意外なのだが、21世紀の今でも、多くの湧き水に遠くからわざわざ水汲みにやってくる人たちがいる。「タダで汲み放題だからだろう」と推断した人がいたが、もちろんそんなケチな発想ではない。水道水に比べて美

味さが断然違うのだ。そのまま飲んでももちろんだが、ご飯を炊いたりお茶をいれたり焼酎やウイスキーの割り水に使っても、それぞれの味が見違える。人がどれだけ人工的に「飲用に適した水」をつくっても大地から自然に湧き出す水のほうが美味しいのだから、やはり自然の力は侮れない。

東由利の八塩山麓に湧く「ボツメキ湧水」の「ボツメキ」という奇妙な名前は、どくどくと水が溢れ出す様を現わしたものだらしい。古くから地域の人々に親しまれていたのだろう。近年は水質の良さが認められてビールや日本酒の仕込み水にも使われているが、それでも大半は利用されることなく川に流れ込んでいる。もったいないような気もする。

自然からの贈り物に感謝しつつ、ペットボトルやポリタンクを持参して大いに汲んで帰りたいものである。

アポイ岳に登る

永井登志樹

2カ月ほど前、北海道の洞爺湖町で開催された第2回日本ジオパーク全国大会(洞爺湖有珠山大会)に参加したついでに、北海道東南部の様似町にあるアポイ岳ジオパークを訪れ、アポイ岳(810.2m)に登ってみた。

今から約1300万年前に北米プレートとユーラシアプレートが衝突したことによって、日高山脈が形成された。それに伴って、地下約60キロの上部マントルが押し上げられて地表に露出したとされる。この上部マントルを構成しているのが「かんらん岩」という岩石。アポイ岳は山全体が、通常は地下30キロメートル以下の深い場所にしか存在せず、本来地表にあるはずのないこのかんらん岩でできている。

ビジターセンターのある登山口から5合目までは、森の中を歩く。背後から人の呼吸音が近づいてきたと思ったら、背の高い外国人が短パン姿で登山道をジョギング?しているのだった。元気な人もいるものだ。

山小屋のある5合目からアポイ岳山頂が望める。アポイという一度聞いたら忘れられない山の名は、アイヌ語の「アペ(火)・オイ(多い所)・ヌプリ(山)」が略されたもので、「大火を燃やした山」という意味になる。アイヌの人びとにとって大切な食料であった鹿が授かるように、火を焚いてカムイ(神)に祈ったという伝説に由来するという。

5合目からは、山頂がすぐ手の届きそうなところに見えるが、ここからかんらん岩が露出した急坂を登り、いったん尾根に出てから稜線をたどっていくので、山頂までは結構な距離がある。標高800m足らずなので、山登りになれた人にとっては低山の部類に入るかもしれないが、車道などはないため、少なくとも8合目まで車で行ける秋田駒ヶ岳(1637m)などよりは、ずっと手強いはずだ。

登山道のかたわらにミヤマワレモコウ、ヒダカミセバヤ、コハマギクなど、秋田ではほとんど見たことのない花が咲いている。秋のアポイ岳を代表する花であるコハマギクは、海岸の岩場でも群落が見られた。

超塩基性というかんらん岩の特殊な土壌条件と、日高山脈の南端近くの海岸にそびえるという気象条件で、アポイ岳には固有の植物が多く生育し、花の山として知られている。ヒダカソウなどの高山植物群落は国の特別天然記念物に指定されていて、昔も今もジオパークとしてではなく、高山植物目当ての登山者が圧倒的多数を占めるらしい。

以前はあまり植物に興味がなかったが、ジオパークに関わる仕事をするようになって、鉱物だけでなく植物へも関心を持つようになった。それには、多くの人がそうであるように、デジタルカメラで得た接写の楽しみも深く関わっていると思う。おかげで名前も知らない花の画像が、整理されないままパソコンを占領している。

6合目から7合目にかけてかんらん岩の岩場が続く。このあたりでは、さまざまなタイプのかんらん岩を観察できるほか、はんれい岩とかんらん岩が層状に重なっている露頭も見られる。はんれい岩もかんらん岩と同じく深成岩の一種。男鹿半島ではほとんど見られないので、2つの岩石がこうして積み重なっているのは、本当に珍しい。

7合目を過ぎると「馬の背」と呼ばれているアポイ岳西方の尾根に出る。ここから360度の視界が開け、アポイ岳山頂に向かって左側(北側)尾根には、三角形のピークの新田岳、さらにピンネシリ(958.2m)が連なり、その背後に日高山脈南部の脊梁が見える。これらの山の斜面や稜線のところどころにかんらん岩が露出しているのが、はっきりわかる。この稜線は、「幌満かんらん岩体」と呼ばれている厚さ約3000mものかんらん岩の岩体の最も上の部分にあたるといい、この山塊全体がかんらん岩でできているということが実感される。

8合目から山頂までは、ごつごつしたかんらん岩の岩場の連続で、登山者に踏まれて岩の表面が削られ、ツルツルになったものもある。かんらん岩の主要鉱物であるかんらん石の学名は、色合いが植物のオリーブに似ていることから、「オリビン(olivine)」といい、「かんらん(椰欖)」はその和訳だという。その名の通り、黄みを帯びた緑色、あるいは濃い緑色の美しい岩肌の登山道に行くのは楽しい。

アポイ岳のかんらん岩は上部マントルにあったままの状態を保ち、とても新鮮な状態で地表に露出しているのだという。そのため、地球内部の状態を知る上で学術的に貴重な場所として世界的にも注目され、世界中から研究者がやって来る。私が泊まった町営の宿にも、白人の研究者グループが同宿していて、国際色あふれにぎやかだった。おそらく、さつき登山道を走っていた人も、その中のひとりだろう。

急な岩場を息を切らして登っていくと、吉田岳、ピンネシリの北尾根が間近に迫ってきた。振り向くと、「馬の背」の稜線の向こうに様似の町と太平洋が広がっていた。この地形はまさにアポイ岳ジオパークのテーマである「マントルからのメッセージ」そのものように思える。

アポイ岳の山頂は不思議なことにダケカンパに覆われていた。普通、山の植生は標高が高くなるにつれて、広葉樹林帯ー針葉樹林帯ーダケカンパーハイマツと移り変わっていくのだが、ここではハイマツ帯からダケカンパ帯に逆戻りしている。なぜだかわからないが、アポイ岳の植生の不思議のひとつだ。あまり視界がきかないが、それでも樹林の間から太平洋の海原と襟裳岬が望めた。

登り約3時間、下り約2時間。標高は低いが、車道もなく、サブルートも現在閉鎖されているため、かんらん岩や高山植物を観察しながらゆっくり登ると、往復5時間は要する。普段、運動らしい運動をしていない私のような者には、思ったよりきつかった。でも、それだけの価値のある山。高山植物が咲きほこる春から初夏にかけて再び訪れてみたいものである。

男鹿半島・大瀧ジオパークとは全く異なる地質、岩石、植物。そして景観。とても刺激的で勉強になったジオの旅であった。



かんらん岩が露出したアポイ岳の稜線